

「親も オヤオヤ…」一親は親らしく育てているのか

(251号 1997.5)

親が分からなくなってきた

変わってきたのは、子どもばかりではない。親つまり保護者も、思いもよらない行動をするようになってきた。

<例>

◎全ての子どもに、できるよう、わかるようになってほしいとの思いから、遅れてる子を残して教えていると親から電話。「あの、うちの子まだ帰ってこないんですが…。えっ、学校に残ってるんですか。塾があるので、すぐ返してもらえますか。」

別の保護者

「えっ、残っている…。うちの子はやる気になったらできるんです。残して勉強させるなんてやめてください!!」(なんで怒られなあかんねん。)

◎日曜参観バージョン

日曜参観の前日には、必ずと言っていいほど親からの手紙が届く。内容は、「明日家庭の都合で休みます。」悪いけど、子どもに理由を聞いてみる。「明日、サッカーの試合がある」「明日塾のテストがある。」(この日は学校があるんや。学校が。)

◎子どものもめ事バージョン

もめていた2人を呼んで、それぞれの言い分を聞き、その後、1時間ぐらい話し合っ、一応解決。(したと思っていた)

次の日、2ページに渡る連絡帳(手紙)が届く。非常に長い手紙だが、要は、「うちの子がそんなことしていないと言っている。どうして犯人のような扱いをするのか。」ということだった。(そんなことしてへんて。子どもを信用するのもええけど、少しは疑えよ)

◎通知表バージョン

終業式の日、一人ひとりに、「頑張ったところや努力する必要があるところ」を話しながら渡す。

子どもの下校後、学校に電話。

「どうして理科『よくできる』になっていないのか。うちの子はよく頑張っていた。テストもだいたい90点以上だった。いったいどういう基準で通知票を作っているのか。私も教員免許もってるし、私の母も小学校の教師をしていた。母もおかしいと言ってる。」
わが子は可愛いのはわかるがこんなことまで言うか。

◎まだまだある

「靴のひもが結べないから教えてほしい。」

「○○ちゃん(自分の子どもをちゃんづけで話す)給食に出るぶどうパンのぶどうが嫌いなんです。ブドウとってやってください。」「机の上(自宅の)が汚いのをで注意するんですが、私の言うことなんか聞きません。先生から言ってきてください。」「宿題が多すぎます。塾の宿題ができないので少なくしてください。」「宿題が少なすぎます。もっとどンドン出してください。」「(どないせえ、ゆうねん)」「自由勉強が出ると、うちの子は真面目なので夜中までやっている。出すのをやめてほしい。」

このまま書いたらページが何枚あっても足りない。驚くことが多すぎる。

ヤンママとブランドママ

我がまま言いたい放題の母親にも2通りあるようだ。

①自分も遊びたいヤンママ(ヤンキーママ)

茶店、カラオケ、パチンコ…。こういう所をこよなく愛する。我が子とも、まるで遊び友達のように接する。自分の子どもに対して。「こいつアホやで」「しばいたるか」「おまえなにいうてんねん」「なに泣いとるねん。やられたら、やりかえせゆうてるやろ」

子どもも親に対して、同じような言葉のやり取りをする。子どもの髪の毛は、オオカミヘアーや茶髪。

②お勉強一本やりのブランドママ

名門○○中学を目指して(といっても決して子どもが望んだわけではない)子どものしりをたたき続ける。子どもは親にほめられたくて必死にがんばっている。テストの点数(と言っても塾のテスト)や偏差値が上がると、ゴ・キ・ゲ・ン。「今度のテストよかったら好きなもん買ってあげる」もので子どもの機嫌をとる。子どもはほとんど毎日、夕食の弁当を持って塾通い。6年生の3学期になると、入試が終わるまで、平気で学校を休ませる。※親たちとの協力・共同が大切なのはよくわかってるつもりだ。しかし、多忙化する教育現場の現状の中で、この親たちとどうきり結んでいけるのだろうか。

子どもの自立を保障するために

子どもは親の私有物ではない。次の社会の担い手となるためにも、子どもたちは人間として必要な多くのことを学んでいかなければならない。しかし、子どもの事実は、掛け声だけでできるものではない。それには親自身の子離れ子どもからの自立がからみついているように思う。「子どもを育てる」とはどういうことなのかということについて、親たちに語らねばならないのは、やはり私たちがなのだろうか。理想や理念だけでは通用しないだけに荷が重い。

子どもの事実を前提は、親はたった一度の人生をより充実したものとして生きよう、悔いのない人生を送ろうと努力することだろう。そうなってほしいものだ。